

# 令和3年度自己評価表

### 【中長期目標(学校ビジョン)】

- 1 主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
- 2 チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。
- 3 地域連携の主体となり、地域に根ざした学校としての役割を果たす。

### 【今年度の重点目標】

- 1 授業に集中
  - ① 高校生活や授業におけるマナーの徹底
  - ② 全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的にALやICTに係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。
- 2 行事で団結・部活は熱中
  - ① 本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティを育むとともに、地域から信頼される学校作りを行う。
  - ② 生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。
- 3 進路に挑戦
  - ① 基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。
  - ② 多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。

|            | 具体的項目   | 令和3年度当初   |   |   | 評価結果(3月)   |    |  |
|------------|---|---|---|---|--|----|--|
|            |   | 現状  | 目標<br>(年度末の目指す姿)  | 目標達成のための方策  | 経過・達成状況  | 評価 | 改善方策   |
| 1<br>授業に集中 | 高校生活や授業におけるマナーを徹底する。  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・98%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけている。(生徒がルールやマナーを守っていると評価している保護者の割合は98%、職員の割合は99%)</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合が98%</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自律的にルールやマナーを守ろうとする八頭高生の育成を目指し、挨拶の重要性やマナーの遵守について粘り強い指導を行い、様々な機会を捉えて保護者の理解を図るとともに、生徒に対しては「伝わる」指導を行う。</li> <li>・学校評価アンケートの結果を分析し、教育活動の改善に生かす。</li> <li>・生徒保健委員会生活リズム調査を毎年実施し、保護者との連携を図りながらルールづくりを進めるなどしてスマートフォンの長時間利用者の指導を継続する。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大半の生徒は爽やかな挨拶ができ、ルールを守る姿勢も良好である。学校評価アンケートでは98%の生徒が「ルールやマナーを守るよう心がけている」と回答した。</li> <li>・登下校時に歩きスマホやイヤホンを利用したり、頭髪服装指導時に再指導を繰り返す生徒も若干名おり、自律的にルールやマナーを守ろうとする姿勢には至っていないのが現状である。</li> <li>・生徒保健委員会による生活リズム調査を毎年実施できた。その結果については、SHR・保健LHRでの呼びかけや保健便りの発行、学校保健委員会での報告と協議を通して、スマートフォンとの向き合い方も改善傾向である。</li> </ul>  | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価アンケートでは生徒の98%は「ルールやマナーを守るよう心がけている」と目標達成できたが、保護者は97%、職員は94%と昨年を若干下回った。少しの変化だが、守ろうとはするが守れない原因があるかもしれないので今後も生徒としっかり向き合っていく。</li> <li>・登下校中の安全や校則について、生徒自身にもルールやマナーを守る必要性について考える時間を作っていく。</li> <li>・オンライン授業で生徒の中にはスマートフォンで授業を受けている生徒も多いのが現状である。また来年度一年生から一人一端末を使用することになる。情報端末の使用に関する規程を定め適切な指導について指導する。</li> </ul>   |
|            | 全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的にALやICTに係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・AL9の視点をもとに生徒の活動やICTの活用を積極的に取り入れ、延べ15名の教員が公開・研究授業を実施。</li> <li>・外部講師を招いて昨年11月に授業改革研修会を実施。示範授業と研究協議により、探究活動における「問いづくり」について見識を深めた。</li> <li>・昨年11月段階で1日あたりの学習時間は、1年生102分、2年生91分、3年生144分。うち、1年生2時間以上は35%、2年生2時間以上は28%、3年生3時間以上は38%。6月調査と比べて減少している。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の自宅学習時間が1、2年生90分、3年生200分</li> <li>・教員のICT活用力を向上させ授業に積極的に活用し生徒の理解向上の一助とする。</li> <li>・AL9の視点を持って、全教科で公開授業を実施</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・各教科で年に2回(6月・10月)に研究授業を実施する。</li> <li>・研究授業は、事後に合評会を実施し授業者・見学者の今後の授業改善につなげることを基本とする。</li> <li>・Google Workspace for Education、スタディサプリ活用等に係る研修を実施し、ICTの得意分野を教員が理解し、省力化を図るとともに、生徒の学習を補助するツールとしていく。</li> <li>・授業改革研修会を実施し、ICTに係るスキルの向上を図る。</li> <li>・各教科のICT係を1名決めて、情報担当教諭とともにICTの有効活用について知識を深める。各係は、科会等で伝達を行う。その知識をスタディサプリの利用などにも広げ、課題や補習の省力化・生徒の学習時間の確保を図る一助とする。</li> <li>・定期的に自宅学習時間調査を行い、担任の個人面談や教科担当者の時宜を得た面談とおして効果的な学習を支援する。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究授業の実施者は、6月1名、10月～1月にかけて14名の計15名が実施をした。</li> <li>・Google Classroomは諸連絡用に学校・学年・学級単位のクラスルームを作成するとともに、オンライン授業に備えて授業単位のクラスルームを作成した。全体への諸連絡や、授業ごとの指示連絡等に多くの職員が活用している。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症対策として急遽オンライン授業を実施することとなり、研修会や事前の接続確認を経て現在も授業配信を実施している。</li> <li>・自宅学習時間調査(4月)[11月]においての1日あたりの学習時間は、1年生(104分)[104分]、2年生(93分)[102分]、3年生(99分)[146分]であった。1、2年生は目標に達しているが、3年生の宅習時間がとれていない。</li> <li>・ICT活用スキルを職員全体で共有することができ、実際の授業等に用いることができた。</li> <li>・オンライン授業の実施や県の発出する警戒段階によって、行事の見直しが必要になったが、各学年・分掌と意見を調整することによって、対応することができた。</li> </ul> | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・公開授業については、年度当初の教科会で早めの担当者決定を促す必要性があった。また、教務配布の研究授業連絡用紙には各教科1名以上と記してあり、教科間の研究授業の頻度に偏りが生じている。3～4年で全ての教員が研究授業を行う等、実施の形態を変更する。また、年度の後半で実施の偏りが大きかったため、調整を行う。</li> <li>・研究授業時、同一教科の教員の時間を空けるよう、時間変更を極力行う。授業実施後の合評会の実施を、科会時での実施も含め極力実施をしてもらうように呼びかける。</li> <li>・オンライン授業の実施についてはスピード感を持ち全体で対応することができた。年度内に分散登校時のオンライン授業について課題を取りまとめ改善へつなげる。</li> <li>・スタディサプリは、現3年生が全員加入していないので、緊急時の学習ツールとしては活用できない状況がある。反転授業にも利用可能なので、効率的に利用するために全員加入が望ましい。</li> <li>・オンライン授業の対応等、情報担当職員の負担が増している。教科ICT係の活用等を行い、全体のスキルアップの実施が必要不可欠である。</li> <li>・学習評価及びchromebook活用に関する職員研修を実施した。いずれも校内研修となったが、積極的な活動が見られたので、継続を図りたい。</li> <li>・宅習時間を増やす仕組みを、学年を越えて模索していかなければならない。</li> </ul> |

|                  | 具体的項目   | 令和3年度当初  |   |  | 評価結果(3月)   |    |  |
|------------------|---|--|---|--|--|----|--|
|                  |   | 現状   | 目標<br>(年度末の目指す姿)  | 目標達成のための方策   | 経過・達成状況  | 評価 | 改善方策   |
| 2<br>行事で団結・部活は熱中 | 本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティを育み、地域から信頼される学校作りを行う。          | <ul style="list-style-type: none"> <li>八頭高愛し愛され運動の参加者は、第1回(6月)が371名、第2回(11月)が297名、延べ人数668名であった。全校生徒数(767名)に占める割合は87%で、年度当初の目標値を大きく超えることとなった。</li> <li>昨年度1年生の総合的な探究の時間より探究活動を実施。今年度より2年翠陵探究が開始。</li> </ul>                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>八頭高愛し愛され運動への参加者が各回とも全校生徒の30%以上</li> <li>探究活動(1・2年生)をとおして、課題等に関する思考力や実行力が向上したと考える生徒の割合が60%以上</li> <li>探究活動(2年生)をとおして、地域の理解が深まったと考える生徒の割合が70%以上</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>八頭高愛し愛され運動、中学生体験入学、翠陵祭八頭高ライフ体験等の諸行事や学校生活等の様々な場面において生徒が主体となって企画・実施に取り組むとともに、その方法を下級生に引き継ぐことができるよう指導を行う。</li> <li>探究活動のプログラムの充実を図り、生徒が主体的に行動できる教材を開発する。</li> <li>地域への理解を深めるため、キャリアパスポートの活用を充実させるとともに、アンケートを実施して生徒の意識、理解の変容を把握する。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>八頭高愛し愛され運動を6月と11月の2回実施した。6月は、生徒265名が参加し、約35.3%の参加率、11月は、生徒241名が参加し、約32.2%の参加率となった。2回ともコロナ禍にも関わらず、多くの生徒が参加した。各回ともに目標の参加率30%以上を達成した。</li> <li>来年度に向けてプログラムの改良を継続的に行っている。2年翠陵探究の鳥取大学・企業との連携は活動が計画通りに進まない部分があり、十分な連携ができていない。全探究活動において、分散登校等の影響により、今年度の発表を中止とした。</li> <li>第1回アンケートより、思考力等の向上意識の割合「はい」37.64%「どちらかといえばはい」56.3%。また、地域理解の深まりの意識の割合「はい」42.0%「どちらかといえばはい」53.7%。概ね良好であった。第2回を年度末に実施予定。</li> </ul>   | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>取組継承の観点から1年生執行部員が中心になって企画・運営にあたった。生徒会執行部の全校生徒への呼びかけ方を工夫しさらに参加者の増加を目指したい。</li> <li>主体的な活動とするためのプログラム開発は今後も検討が必要。生徒の興味関心を引き出す資料づくりや指導者のスキルアップを図るための情報提供等が今後もなお一層必要と考える。また、外部の関係機関との連携の仕方をより機能的になるように改善する必要がある。</li> <li>思考力や実行力、地域理解の深まり等に関して、肯定的な意見は90%を超えているが、積極的な肯定的意見「はい」の割合を向上させたい。後期は、全学年とも情報収集・分析・発表等の活動が入り、また、2年翠陵探究では、大学や企業連携で外部の方との接触がある。このような取り組みを充実させることで、積極的な肯定的意見「はい」の割合を向上させたい。</li> </ul> |
|                  | 生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>86%の生徒(保護者78%)は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。</li> <li>感染症の影響で、高校総体等多くの全国大会が中止となった。少ない競技のなかで、全国大会に出場した体育コース生は10名(探究・総合コースは23名)であり、運動部活動において活躍するとともに、リーダーとして実績を残した。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の心身の悩みに適切に対処していると回答する生徒の割合が85%、保護者の割合が80%</li> <li>全国大会に出場した生徒数が80人</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>日々の生徒観察や声かけ、hyper-QUの分析・検討会、個別面談、教育相談・特別支援委員会、教育相談係・保健係連絡会、人権教育LHR等を通して生徒の悩みを把握する。</li> <li>教職員同士がコミュニケーションを密に取り合い、保護者との連携も図りながら生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう指導・支援する。</li> <li>教職員及び関係者がコミュニケーションを密に取り合い、随時協議し、保護者との連携も図りながら生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう指導・支援する。</li> <li>体育コース・類型のみならず、全校で特色ある行事を継続実施し、学習面、生活面の充実を図り、学校生活、部活動のリーダーとしての自覚を促す。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>いじめアンケートを2回、Hyper-QU調査を2回実施し、悩みを抱えている生徒について情報共有を行った。人権教育LHRは4回実施し、その後の人権教育推進委員の意見集約などを通して生徒の悩みや要望も把握した。</li> <li>学校評価アンケートでは93%の生徒が「いじめや差別を許さない実践力を育成している」96%の生徒が「安全に配慮して教育活動をしている」87%の生徒が「心身の悩みに関わる相談について適切に対処している」と回答しており、コロナ禍においても概ね達成できた。「心身の悩みに関わる相談について適切に対処している」という項目について保護者の肯定的回答は78%(昨年同様)であった。</li> <li>支援を必要とする生徒については、学年団、教育相談係、各教科担当者と情報共有し、必要に応じて保護者面談などを実施した。</li> <li>全国大会出場者<br/>ホッケー(男子・女子)、陸上競技、卓球、柔道、書道、放送バレーボール(全国選抜チーム代表)、歴史研究同好会<br/>ビブリオバトル<br/>合計 67名</li> </ul> | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>来年度もいじめアンケート、Hyper-QU、人権教育LHR等を通して生徒把握や情報共有を行うとともに、日頃から生徒をよく観察しながら生徒の悩みに適切な対応ができるよう職員間や保護者との連携を強化していく。今後もコロナ禍が続くことが予想され、心身の健康を第一に考え、生徒支援に心がけていく。</li> <li>支援を必要とする生徒に対しては、校内での情報共有をはじめ、引き続き外部機関との連携を深めるような指導体制を充実させていく。</li> <li>各部が全国大会出場を目指し、生徒も指導者も日々の部活動に一生懸命取り組んだ。しかし、残念ながら目標80名をクリアすることはできなかった。来年度もこの取組を継続し、目標を達成したい。</li> </ul>  |
| 3<br>進路に挑戦       | 基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>進路を実現するために目標に向かって努力している生徒(11月)は、1年69%、2年76%、3年97%である。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>進路実現に向けて努力している生徒の割合が1年生70%、2年生75%、3年生95%</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>進路指導のための事業や、各コース・類型、各分掌及び学年等の諸行事について、その意図・意義を生徒にしっかり理解させ実施することにより、視野を広げ、キャリアデザインにつなげていく。</li> <li>キャリア教育全体計画に基づき、キャリア設計講演会、「大学生に聞く」講演会、長期休業中補習、勉強合宿、土曜学習・質問教室などの活動を通して進路選択と学力向上を図り、進路実現をより確かなものにしていく。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>学校評価アンケートでは、進路実現のために目標へ向かって努力している生徒は全体で84%(1年74%、2年85%、3年94%)であり、数値目標はほぼ達成された。3年生の場合、早い時期に進路が決定する場合があります。調査時期によって数値の変動がある。</li> <li>進路指導に関する行事についてはほぼ予定通り実施することができたが、コロナ禍の影響で3年生の勉強合宿については泊を伴わない勉強会に変えて実施した</li> <li>3年生の補習、二次向け補講については多くの生徒が受講し、国公立大学をはじめ、大学受験等に向かうことができた。</li> <li>総合型・学校推薦型入試に向けての個別指導について、ガイダンスを実施したり、合同で集団面接の練習をしたりするなど、組織的に取り組むことができた。</li> </ul>   | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>進路LHRについては学年ごとに目標を設定しながら実施していただいているが、生徒の状況を見ながら進路志望先についての研究をさらに促していきたい。</li> <li>3年生においては放課後補習などをさらに充実し、授業に加えて各教科の学力がしっかりと大学入試につながるように環境を整えていかなければならない。</li> <li>学習環境の整備、勉強合宿の企画などを組織的に行う。</li> <li>ブロック大以上の大学を目指す生徒については学校として把握し、進路検討会の実施や2年次後半以降の過去問添削指導など、組織的に取り組む必要がある。</li> </ul>  |
|                  | 多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>国公立大学志願者(10月)は、1年133名(4月113名)、2年135名(1年4月126名)、3年105名(1年4月126名)である。大学入学共通テスト受験者は130名(総合・探究コースの57.5%)であり、前年比13名減であった。国公立大学合格者数は40名、うち現役は29名。</li> </ul>                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>国公立大学合格者数が60人</li> <li>大学入学共通テストの受験者数が150人</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒との個別面談等をとおして、1、2年生は進路志望の確立とその実現に向けてなすべきことを強く意識させ、目標に向けて自律的に行動できる態度を育成するとともに、3年生は決定した希望進路の実現に努める。</li> <li>大学・学部・学問研究の充実によって、将来のキャリアを見据えた上で何を学ぶべきかを考えさせ、具体的な進路目標に向けて努力する態度を育成する。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>進路志望調査(10月)による国公立大学志望者は1年121名(49.6%)、2年124名(51.5%)、3年107名(41.2%)であった。4月の調査との比較を見ると1年では14人増加、2年では17名減少、3年でも17名減少だった。3年生は例年並みであったが、1,2年においては目標に及ばなかった。4年制大学志望者全体は1年177名(72.5%)、2年179名(74.3%)、3年176名(67.7%)であった。専門学校志望者は医療・看護系志望者を中心に1年41名(16.8%)、2年47名(19.5%)、3年48名(18.5%)であった。全体的に4年制大学を志望する生徒の割合が増加している。国公立大学志望者もほぼ例年並みだが、進路指導の取り組みやしっかりとした学力の修得によって志望の維持を図ることが必要。共通テストの出願は131名であった。</li> <li>総合型選抜、学校推薦型選抜での受験を勧め、のべ36名が出願、18名が合格した。国公立大学は58名が合格した(現役は49名)。</li> </ul>                   | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は大学、特に公立鳥取環境大学と連携した行事を積極的に実施し、3年生の地元国公立大学への志望を増加させることができた。来年度に向けて継続するとともにさらに充実させていきたい。</li> <li>大学・学問研究の一層の充実のために生徒自身が主体的に進路情報を収集・活用できる環境を充実させる。ICTの活用もさらに進める必要がある。</li> <li>小論文や面接指導の機会が増えており、入試において重要性が増している。教員の指導スキルの向上、組織的な指導の取り組みが必要。</li> <li>進路指導シラバスを作成し、LHR等を効果的に活用する。</li> <li>難関大に挑戦する生徒の育成と組織的な取り組みが必要。</li> </ul>   |

評価基準 A：十分達成 [90%]

B：概ね達成 [80%程度]

C：変化の兆し [60%程度]

D：まだ不十分 [40%程度]

E：目標・方策の見直し [30%以下]